

Marine

ニッポンの海は今がベストシーズン!

全356ページに海の最新情報が満載!

Divining

3大付録

- ①携帯保存版 スキルアップ寺子屋
- ②近場の海は今が旬! 週末ダイビングBOOK
- ③全152種 エビ・カニ・ウミウシポスター

No.483

OCT.2007

特別定価 ¥1,000

10

<http://marinediving.com>

<http://www.marine-web.com>



海外Cカード
取得ダイバー
必見!

夢を叶えるダイバーズアイランド

マンタのベストシーズン到来

モルディブ × 石垣島

タイ・アンダマン海、ニューカレドニア、パラオ
沖縄・サンゴ群島、沖縄本島

スキル&マナーがグ〜んと上達

脱ビギナー宣言!

伊豆大島 富戸 稲取 伊東 初島
南部・田辺 牟岐 大月町・柏島

アンケート先着
400名さまに
写真集『TAHITI』
プレゼント!



「明治政府の遺産 海底に眠る ニール号の謎」の 水中班を追う!



郵船ニール号

1864年 フランスで建造
3本マストの蒸気帆船

8月5日放送「明治政府の遺産 海底に眠るニール号の謎」フジテレビ系列で放送・テレビ静岡制作 (画像提供)



当日の海底調査で活躍したダイバーチームの皆さん

去る8月5日、フジテレビ系列で全国放映されたテレビ番組はご覧になったでしょうか? 今から133年前の1874年、静岡県伊豆半島沖に沈んだ「ニール号」に搭載されていた国宝を探すという、ロマンあふれるアドベンチャーもの。本誌は撮影収録現場で、2004年から調査が始まったという「ニール号」水中調査チームを追った。

■協力/テレビ静岡、伊豆西南海岸沖海底遺跡〔沈船〕調査研究会、NPO法人静岡県ダイバーズ協議会、水中遺跡発掘協力会
■写真/水中造形センターマリンフォトライブラリー
■監修/魚山倫生 ■構成・文/後藤ゆかり

海底遺跡として認定された ニール号とは?

ウイーン万博に出品した日本の国宝が搭載されていたニール号

南伊豆地方では昔から沖に沈船があることは言い伝えられていたという。だが、伊豆半島のほぼ先端では年間を通して穏やかな海況の日が珍しく、いつも海流が激しくぶつかり合うエリアということでこれまで潜って捜索しようなどという者はいなかった。

その沈船というのは1874年3月22日、入間沖で座礁し、沈んだフランス郵船「ニール号」。全長98メートル、高さ41メートルの巨大帆船で、当時の船舶の中では最高の技術といわれる鉄造の船であったという。

1873年、ウイーンで開催された万国博覧会に出品した、日本の国宝級の美術工芸品を日本に戻すために、フランスが誇る郵船「ニール号」

号」が選ばれた。搭載されていたものの中には、源頼朝が使用していた太刀や、鶴岡八幡宮の最高級時絵漆器「北条政子の手箱」など、歴史的に非常に貴重な品々があった。ウイーン万博後、乗組員30余名を乗せ、マルセイユ港を出港、香港を経由して横浜港へ向かっていたのだが、目的地を目前にしてここ伊豆半島南の入間沖に沈んでしまったのだ。

海中で「ニール号」発見! ストーリー

ハイテク技術では見つからなかった(?!)
「ニール号」

「この位置網は引っかけたて困る。」

妻良の漁業関係者からたまたま聞いたばやきに、当時から「ニール号」の存在を知っていた魚山倫生さん(現在、「ニール号」学術調査団水中調査班のチーフ)は、「もしかしら、沈船の何かがあるのかも知れない」と、ピンと来たという。

その後、たまたま知り合った《テレビ静岡》の新生名隆大ディレクターに話をしたところ、誰も手をつけていない沈船の捜索に「ぜひやりましょう」と話ほとんどん拍子に進んでいった。

2004年5月、本誌でも82年に連載を手がけていた水中考古学の第一人者、荒木伸介氏を筆頭に、「ニール号」学術調査団(正式名称「伊豆西南海岸沖海底遺跡〔沈船〕調査研究会」)が結成された。

漁業関係者がぼやいていた、位置網の引っかかる場所に実際に潜り、探したところ、ビットと呼ばれる係

当時、近くの妻良港にボートでたどり着いたのはたった4名。行方不明者が55名、遺体となって引き揚げられた人が31名いた。また、190点余りある工芸品のうち約60点が回収されたが、ほとんどが海の底へと消えた。

以来30年余り、深い海底に眠っていた「ニール号」に、ついに調査の目が向けられたのは2004年のこと。テクニカルダイビングが日本でも普及し始め、より深い海で長くダイビングすることが可能になってきた時代であった。

テクニカルダイビングの 粋を結集した海中調査

探検、冒険、探索というのは行き当たりばったりで何とかなるものではない。ビットが発見され、高性能の探査機では見つからないということは、「ニール号」の残骸が広範囲に細かく散らばってしまったかもしれないことを示す。が、潮の流れや波の力を考えると、そんなにバラバラになっているわけではない。

「発見するには推理と人間の目しかない」と考えた魚山チーフは、テレビ静岡のバックアップを得て、ビットの埋まる地点を中心に、東西南北延べ3000メートル以上のラインを引いていった。ダイブ数にして100本ぐらいいったたのではないかと。魚山チーフはそうして場所を絞り込んでいき、「砂地から西にはおそらく何もなさそう。あっても砂に

留ロープをもうやうための柱に似たものが海底約37メートルの砂に埋まっているのがわかった。ビット構造物を水中スクーターで掘り下げてみると突起物が出てきた。

荒木隊長によると、帆船にしかないタイプの突起物であり、フランスのマルセイユ海事資料館から取り寄せた過去の資料から、このビット構造物は「ニール号」と断定できる証拠となった。翌2005年、正式な遺跡「(伝)ニール号沈没地点」として静岡県に登録。

ビットの発見により、沈船の捜索範囲はかなり絞り込まれた。だが、最先端の高性能音波探査機などが導入されたものの、なかなか見つからない。既に発見されているビットの鉄製構造物を採取すると、本来あるはずの磁気がなくなっているこ



ついに今年、発見された第1アンカー (写真/魚山倫生)



「ニール号」の海中調査チームの魚山(水掘り協力)倫生(水中調査)

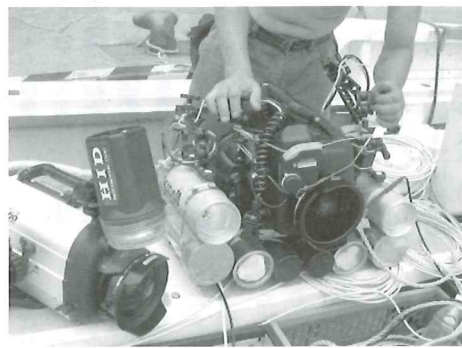


水中撮影の前に考古学者陣と打ち合わせをする魚山氏。右から団長の荒木伸介氏、琉球大学・池田榮史教授、東海大学・根元謙次教授

「ニール号」の海中調査の主要メンバー。左から村田健、村田清臣、魚山倫生、名倉克己、鳥羽昭伸の5名（敬称略）



荒波にもまれながら撮影は行なわれた



収録当日、使用された水中撮影機材。撮影を担当したのは魚山氏



当日、海中調査班はナイトロックで潜った（ほかのダイバーチームはエアタンク）



海中調査の幅を大きく広げてくれた水中スクーターを持つ、村田氏。ちなみに村田氏の水中マスクは遠近両用でこれもあり役立ったとか



2ダイブ目は減圧停止の際に純酸素を使用するため、装備を行なう名倉氏



3艇の撮影チームのほかに、万が一のためのサポート船。大岩先生と日本CMAS協議会会長の佐藤矩郎氏が同行



サポート用にシングルチャンバーを用意してくださった大岩弘典先生（右）と羽生田義人氏（パロテックハニユウタ）

埋もれていて発見不可能」と考え、岩礁と砂地の境に南北にラインを引き、そのラインから一定の間隔で東に搜索する方法を提案。名倉克己氏（前静岡県警潜水隊本部長）、村田清臣氏（静岡県ダイバーズ協議会事務局長）らの協力を得て、搜索を続けることになった。そこで3人は別々の人工的な構造物を発見することになった。

グが行なわれた。利用する道具もより長く、より広く行動できるように改良が重ねられる。ラインは、通常のラインではリールに大量に巻けないので、魚山チーフがポリエスチレン製の直径が通常の4分の1というラインを見つけ出し、さらに大きなリールを潜水器材メーカーの「アポロ」（日本潜水機）に作ってもらったことで、4倍の長さのラインが巻けるようになっていた。また、同じく同社の水中スクーターを改良してもらい、片手で操作するタイプにすることで、行動範囲と操作性を広げることができ、2つのレギュレーターを一本のタンクに独立して装着して、万が一にも対応できるアダプターや、フルフェイ

スを外さなくても減圧停止時に酸素に切り替えられるアダプターを付けたりするなど、テクニカルダイビングの器材の発展にも大きく貢献したといえる。

ウミガメが見つけてくれたアンカー

話はそれだが、「ニール号」の調査が進む中、ある日、前述の3人で南北のラインを引くために潜っていたところ、魚山チーフと名倉氏が巨大なウミガメを発見。村田氏は残念ながら東のラインを引きに行っていたため、その場になかったのだが、ウミガメがあまりにも逃げないので、2人で遊んでいたところ、目的地からちよつとズレていってしまった。

「遊びすぎたかな」と反省して真正面を見ると、ナント、岩の上から何か鉄棒のようなモノが折れているではないか。錨の半分は折れてしまっているが、紛れもなくアンカーだ。もしカメに出会わずに正確に南北にラインを引いていたら、見落としてしまうような位置であった。沈船の沈没位置を特定するためにアンカーが非常に重要とされるが、このアンカーが見つかったことで、「ニール号」の沈没地点がこの近くであることが改めて証明された。今年6月のことである。

調査ダイビングに入った。鳥羽氏はラインの東側を探したところ、大きな鉄の構造物を発見し、魚山チーフは、約20m離れたところで、2つ目は

「ニール号」の謎はまだ眠ったまま

8月5日（日）、放映直前の朝、収録が行なわれた。当日は台風5号の影響で、海はうねりが大きく、レジャーダイビングなら到底中止となるような海況である。南伊豆の子

撮影時は万全のサポート体制も

のアンカーを見つけ出した。残念ながら鳥羽氏の発見した場所へのラインは台風で失われてしまい、現在、再搜索中である。

港から「日栄丸」に乗り込んだ水中班は「丸丸」に乗ったダイバーたちとともに港を出発する。当日設けられた特設スタジオがある吉田浜の沖に、「ニール号」は眠っており、子浦港からは約10分の距離。だが、あまりの波の高さにビックリ。特に岬の突端辺りは、三角波がびしゃびしゃと立っている。船上では屈強なテクニカルダイバーたちですら、必死に踏ん張っている。その光景を見ながら、大型船とはいえ、130年余り前なら座礁してもしかたがないような海況にはまってしまったに違いないという思いに至った。

搜索には2艇のダイビング船のほか、撮影班を乗せた船、そして本誌連載でもおなじみの大岩弘典先生を乗せたサポート船もある。大岩先生は当日、簡易チャンバーを運び込み、ダイバーのサポートに貢献していた。実はその前の台風ですべてのラインやブイが持っていられ、新たに設置し直したという第1アンカーのブイに、当日は潜降していくことになっていた。透明度は2〜3mと、通常より悪い。2ダイブで、ダイバーたちはアンカーやビット、そしてその日初めて発見された鉄製のパイプのような物などを紹介していった。「これらも「ニール号」のものではないか」と推測できる謎の構造物をはじめ、今後まだまださまざまな物が発見される可能性は大きい。荒木団長も言うように、漆器のようなものであれば水中に眠っている可能性もある。もしかしたら今後、はかりしれない宝物が見つかるかもしれない。